さまよえる脳髄

逢坂剛

新潮社

脳髄

逢坂剛

新潮社

●新潮ミステリー倶楽部特別書
うさかごう●印刷・1988年10
者・佐藤亮一●発行所・株式会社新
町71／振替東京4－808／電話・業
3（266）5411●印刷所・二光印
会社●定価1200円●乱丁・落丁本は、ご
さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-602702-X C0393

下ろし●さまよえる脳髄（のうずい）●著者・逢坂剛・お
月20日●発行・1988年10月25日●発行
潮社・郵便番号162東京都新宿区矢来
務部03（266）5111・編集部0
刷株式会社●製本所・大口製本株式
面倒ですが小社通信係宛お送り下
©Gō Ōsaka 1988, Printed in Japan

さまよえる脳髄

装幀　平野甲賀
装画　坂爪厚生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

光がまぶしい。

ビルの壁一面にはめ込まれたガラスが、太陽をまともに反射している。ここはホテルの五階だっただろうか。ルーフ・バルコニーを利用した、屋外のカフェテラス。今日みたいに暖かく、天気のいい日はいつも満員だ。

若草色のブラウスに、水色のスカートをはいたウェイトレスが入れ代わり立ち代わり、まるで浅瀬を泳ぐ鮎のように、テーブルの間をきびきびと動き回っている。しかしだれもこちらに目を向けない。

壁面から少し離れたテーブルにすわったところだが、ウェイトレスが気づいてくれるまでにたっぷり一分かかった。それも手を上げて合図したあげくのことだ。

ようやくやって来た。

「いらっしゃいませ」

優雅な身のこなしで、テーブルに水を置く。

「コーヒーだ。急いでな」
ウェイトレスは、びっくりしたように背筋を伸ばし、唇を噛(か)み締めた。
何を驚いているのだ。ちょっとぶっきらぼうだったかもしれないが、そんなに目を丸くするほどのことではない。こっちはさっきからいらいらして待っていたのだ。ここに一日中すわっているとでも思ったのか。
「かしこまりました」
固い声で言い、しずしずと引き下がる。
気取ったウェイトレスだ。一流ホテルという触れ込みだから、しつけは行き届いているのだろう。しかし一皮むけば、そこらを遊び回っている小娘と変わりはない。あの取りすましたけつっぺたを、後ろから思い切り蹴飛(けと)ばしてやったら、どんなにすっとするだろうか。いや、待て。こんなところで、よけいな騒ぎを起こすわけにはいかない。
テーブルをいくつか隔てた向こうに、例の女がすわっているのが見える。淡いピンクのツーピースに、切れ込みの深い大きな白襟のブラウス。もう三十をいくつも過ぎているだろうに、もう少し年相応の服を着るべきではないか。それとも、ふだん色気のない白衣を着ているせいで、私服のときはつい若作りをしたくなるのだろうか。
コーヒーが来た。
「お待たせしました」
声がうわずっている。ちらりとこちらをうかがった目に、怖いものでも見るような光がある。安心するがいい。取って食おうとは言わない。
「さっきほどは待たなかったよ」
にやっと笑って見せると、ウェイトレスは喉仏(のどぼとけ)をひくひくさせた。こわばった微笑を浮かべ、逃

げるように離れて行く。
体の奥に鈍痛がある。
右腕が重い。左手で砂糖を入れ、ミルクを注ぎ足す。うまいコーヒーだ。それだけは認める。もっとも一杯で八百円も取るのだから、うまくて当たり前だ。これでまずかったら、テーブルをひっくり返して、バルコニーから投げ捨ててやる。
例の女もコーヒーを飲んでいる。右手を宙に浮かせ、カップを口元に運ぶ。あれが優雅なしぐさだとでも思っているのだろうか。冗談ではない。そもそも優雅さなどとは無縁の女なのだ。
いずれあの女を始末しなければならない。それがいつになるか、だれも知らないし、知らせる必要もない。あの女が死ぬとき、それを知っているのは殺す人間と、殺される人間の二人きりなのだ。とにかく今のところは、ぴったりくっついて機会をうかがうしかない。焦りは禁物だ。どうせこの手から逃げることはできない。ゆっくり料理してやる。邪魔がはいらないように、ときと場所を選んでやるのだ。
おっと、現れたぞ。カフェテラスの入り口に、男の姿が見える。背の高い、いかつい顔の男だ。こっちの方へやって来る。
やむをえない。
この場は一時退散することにしよう。

2

滝本貞明はキューの先にチョークをこすりつけ、玉突き台の上にかがみ込んだ。背はさほど高く

ないが、横幅がある。台はほとんど体の陰に隠れてしまった。
警視庁防犯部保安二課の主任警部補海藤兼作は、壁際のテーブルでジンジャーエールを飲んでいた。
滝本の背中を見ながら、隣にいる麻薬取締官の木村宏に話しかける。
「こんな店があるとは知らなかったよ」
プール・バーには、玉のぶつかる乾いた音を包むように、聞きなれぬ音楽が流れていた。
木村は角刈りの頭を親指の爪で掻いた。
「時代が変わったんだよ。おれたちが玉を突いていたころとは違うのさ」
海藤は小さく唸り、ジンジャーエールを飲んだ。滝本が台の周りをゆっくりと移動し、またキューを構える。派手なダブルのスーツが、胸元ではち切れそうだった。
木村が言った。
「あいつ、なかなかいい腕してるな。四つ玉なら一本は突くだろう」
海藤はたばこに火をつけた。
「ビリヤードのことはよく分からん。なにしろボウリングより小さい玉で遊んだことがないんだから」
「パチンコもしたことないのか」
「パチンコ玉を靴下に詰めて、ちんぴらを殴りつけたことはあるよ」
木村はくすくすと笑ったが、すぐに真顔にもどった。入り口の方に小さく顎をしゃくる。
「来たぞ」
海藤が目を向けると、サングラスをかけた長身の男がはいって来るのが見えた。ツィードのだぶだぶのスーツを着て、白いスカーフを首に巻いている。かねて二人が目をつけていた、ロック・バ

ンドのリーダー浜野環樹だった。
海藤はたばこを一口吸って揉み消した。
「よし、今日こそとっつかまえてやる」
木村が人差し指を立てて言った。
「滝本はおれに任せてくれ。あんたは浜野を押さえるんだ」
海藤はあまり大きくない木村の体をちらりと見た。
「滝本は手強いぞ。かっとなると手がつけられないという噂だ。油断するなよ」
木村は唇を引き締めただけで、何も言わなかった。
十数台並んだ玉突き台の間を縫って、浜野がぶらぶらと滝本の方へ近づいて行く。ときどき手を上げて、顔見知りに挨拶する。
海藤と木村はさりげなく立ち上がった。壁のボックスからキューを抜き取り、いちばん近い玉突き台に向かう。
そこで四つ玉を突いていた三人の若者が、いかにも邪魔だという顔つきで二人を見た。木村はそれにかまわず、チョークを取ってキューに塗りつけた。
海藤は黙ってそれを見ていた。
「ちょっと、邪魔しないでくださいよ」
若者の一人が抗議した。
「一緒にプレーしようじゃないか。ほんとの玉突きがどんなものか、教えてやるよ」
木村はそう言って上体をそらし、台の上に散らばった玉を見渡した。隅の白い玉のそばへ行き、無造作にキューを構える。
軽く突いた。玉は台上をすばらしいスピードで横切り、もう一つの白玉に命中した。同時に打球

は斜めに方向を変え、一度縁にぶつかって反対側に転がった。二つ並んだ赤玉を立て続けにクリアする。

若者たちは声もなくそれを見つめた。

海藤は目の隅で浜野の動きを追った。浜野が壁際のテーブルにつく。滝本のプレーしている台から、五メートルほど離れた席だった。

木村はまるでそれが唯一の目的のように、熱心に玉を突いた。玉は台上を目まぐるしく駆け巡り、軽やかな音が周囲にこだまする。若者たちは文句を言うのをやめ、木村の妙技に見とれていた。

滝本が玉突き台から体を起こした。

海藤は顔だけ木村の方に向けながら、全神経を滝本に集中した。

滝本はたばこをくわえ、キューを持ったまま台を離れた。浜野のすわっているテーブルに向かう。海藤は体をずらし、二人の動きが木村に見えるようにした。木村は真剣に玉を突き続けたが、もとより二人を視野に収めていることは間違いない。

滝本は浜野の横の壁にキューを立てかけ、椅子に腰を下ろした。浜野がライターを取り出し、滝本のたばこに火をつける。滝本は頭を二度上下させ、何かつぶやいた。

若者たちが嘆声を漏らした。

木村が狙った玉をはずしたのだった。木村は首を振り、台の角を回って海藤のそばへ来た。

浜野がポケットからハードケースの外国たばこを出し、テーブルに置いた。手を伸ばして滝本のキューを取る。

滝本の手が上着のポケットにはいった。何か取り出してテーブルに置く。ピンク色をした、角砂糖の包みのようなものだった。それは玉突き台の縁に載っている、チョークの包みのように見えた。

それがただのチョークでないことは、長年の勘ですぐに分かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海藤は木村を見た。
木村はうなずき、短く言った。
「行くぞ」
二人はキューを投げ捨て、滝本たちのテーブルに向かって突進した。
「滝本、浜野。覚醒剤取締法違反の現行犯で逮捕する」
木村がわざと大声で怒鳴る。
不意をつかれた滝本は、いきなりテーブルをひっくり返した。木村はたじろがなかった。テーブルを蹴りのけ、一直線に滝本に飛びかかる。
海藤はとっさに身をかがめ、フロアに落ちたチョークを拾い上げた。それをポケットに落とし込むと、キューを捨てて逃げようとする浜野をつかまえ、強烈な足払いをかけた。浜野は腰からフロアに転がった。
海藤はその上にのしかかり、腕を背中にねじり上げた。容赦なく両手錠をかませる。
体を起こし、木村の様子を見た。
椅子ごと壁に押しつけられていた滝本が、凄い勢いで木村の胸を突きもどした。木村は後ろへ吹っ飛ばされたが、すぐに体勢を立て直し、もう一度飛びかかろうとした。
滝本は浜野が捨てたキューを拾い上げた。柄を両手で握り締め、思い切り木村のみぞおちを突く。それがもろに決まった。木村は声を上げ、体を折ってフロアに崩れ落ちた。あたりを転げ回って苦しがる。口から何か吐きもどした。
海藤は木村の体を飛び越え、逃げようとする滝本の肩をつかんだ。滝本は振り向きざま、握り直したキューの柄を海藤の頭に叩きつけてきた。
すかさず左腕を上げ、肘でキューを受けとめた。腕がじんとしびれる。右手で力任せに滝本の腹

を殴りつけたが、拳はまるで厚い板壁にぶつかったように跳ね返された。
滝本は海藤にキューを投げつけ、玉突き台の間を出口の方へ逃れようとした。
ときならぬ騒ぎに、プール・バーはしんと静まり返った。いつの間にか、レコードの音楽もとだえている。逃げる滝本の靴音が、妙に大きくフロアにこだました。その体格と形相に恐れをなして、だれも滝本を止めようとしない。
フロアの中ほどで、客がさっと両脇に道をあけた。その間を駆け抜けようとして、滝本は足を滑らせ、つんのめった。台の縁にしがみつき、かろうじて倒れるのを免れる。
それを見て海藤は跳躍した。一七八センチ、七五キロの体が、滝本の幅広い背中をまともに押しつぶす。
しかし滝本はびくともしなかった。海藤を背中に載せたまま、台の上にはい上がろうとする。まるで岩に飛び乗ったような感触だった。海藤は滝本の襟首をつかみ、渾身の力で引きもどした。
滝本は唸り声を上げ、体をよじった。海藤は襟首を放し、滝本を仰向きにして喉元をつかんだ。滝本も下から海藤の喉に手を伸ばす。二人は台の上で首を絞め合った。
海藤が両腕に体重を乗せて絞め続けると、滝本は喉を鳴らして舌を吐き出した。充血した白目が反転しそうになる。右手が台の上に落ちた。その手に赤い玉が触れる。
滝本はそれをむずとつかんだ。
海藤ははっとして首を縮めた。次の瞬間赤い玉が、凄まじい勢いで頭頂部に叩きつけられた。
滝本の力は並のものではない。
頭蓋骨の砕けるいやな音がして、海藤はそのまま暗黒の世界へ落ち込んで行った。

3

三塁後方にふらふらと打球が上がった。
スタンドがどっとわいた。しかし歓声はたちまち潮のように引き、逆に無気味な静寂が球場内を包んだ。
三塁手の高井が、体を斜めにして球を追う。雨上がりのグラウンドに足を取られながら、懸命にバックする。
投手の追分はマウンドに膝を折り、祈るように打球の行方を目で追った。いつの間にかレフト・スタンドの上空に、くっきりと虹が出ている。打球はその虹と交差しながら、弧を描いてレフト線に落ちかかった。そこを目がけて、高井が必死に背走する。
次の瞬間、スタンドがどよめいた。高井が足を滑らせ、バランスを崩したのだった。腰がくだけ、のめるように肩からグラウンドに突っ込む。どよめきが悲鳴に変わった。
チェリーズのエース追分知之は、この日一回裏から八回裏まで、後攻めのレンジャースに対してただの一人も走者を許していない。つまり現時点で完全試合が進行中だった。スコアは一対〇でチェリーズがリードしている。七回表に追分が自ら、センター前へタイムリーを放ってもぎ取った、貴重な一点だった。
八回裏の途中でときならぬ豪雨があり、四十分ほど試合が中断したが、追分は調子を崩すことなく投げ続けた。九回裏も先頭打者を三球三振に切って取った。完全試合成立へあと二人というところまでこぎつけたのだ。正念場を迎えて、東京球場は期待と不安の入りまじった、奇妙な興奮に包まれていた。

レンジャースの二十六人めの打者は、左の代打竹村だった。竹村はツー・エンド・ツーからファウルで九球粘ったが、十球めを打ちそこない、ポップ・フライを上げてしまった。竹村は悔しまぎれにバットを地面に投げつけ、のろのろと一塁へ向かったのだが、すぐに打球がむずかしい方角に上がったことに気づいた。三塁手の高井が危なっかしい足取りで背走するのを見てとると、一転して全力疾走に切り替えた。

したがって高井が転倒したとき、完全試合の夢は一瞬にしてついえ去ったように見えた。

そのとき横合いから、打球の真下へ飛燕のように滑り込んだ者がいる。

遊撃手の磯貝だった。

磯貝はまだ入団二年めだが、守備範囲の広いことでは大学時代から定評があり、初年度で早くもレギュラーの座についた。その磯貝が、いつの間にかするすると高井の後ろに回り込み、打球に向かって頭からダイビングしたのだ。

腹這いになった磯貝の体が、水を含んだ土の上を滑走した。間一髪、打球とグラブが地上すれすれで交差する。

超ファインプレーだ――と見えたのも束の間、ボールはグラブの指先をはじいて、無情にもファウル・ライン上にはずんだ。スタンドからまたも悲鳴に似た歓声がわき起こる。

跳ね起きた高井が、泥を蹴散らしてボールを追った。ようやく追いつき、振り向いたときには、打った竹村はすでにセカンドに達していた。

高井は三塁をカバーした磯貝に返球した。

磯貝はいかにも無念そうに、両手でボールをこね回した。完全試合を無にした責任を、一人で背負うような落胆ぶりだった。

一方追分はマウンドに膝をついたまま、身じろぎもしなかった。ただ呆然と打球のはずんだあた

りを見つめている。
土壇場で完全試合が破れ、スタンドは緊張の糸がぷつりと切れたようだった。落ち着きのないざわめきが球場内をおおう。
その空気を断ち切るように、チェリーズのダグアウトから監督の木元が飛び出した。タイムを要求する。主審に向かって左投げの仕種をし、投手の交代を告げた。まったく躊躇のない指示だった。このような事態に備えて、七回から左腕の坪内に肩を暖めさせていたのだ。
木元の采配は一見非情のように見えたが、勝負に勝つためにはやむをえない措置だった。一点差で走者が一人塁上にいるとき、もしホームランが出れば逆転サヨナラ負けを喫することになる。追分は十中八九手中にした完全試合を失い、ショックに打ちのめされている。追分の性格からして、続投させることは無理だと木元は判断した。完全試合は破れても、勝負を落とすわけにはいかない。
野手はだれもマウンドに行こうとしなかった。それは追分の心中を察して、ということではなかった。陰気で口数の少ない追分は、ふだんからチーム・メートになじまず、一人だけ浮き上がった存在になっている。それがこういう場面で浮き彫りにされたのだった。
木元監督もマウンドに行かず、ラインの外で三塁コーチと立ち話をしている。追分の頭が冷えるまで、時間を稼ごうとしているようだった。
左腕のストッパー坪内が、マスコット・ガールの運転するリリーフ・カーに乗ってブルペンからやって来た。芝生の切れ目でグラウンドに下り、マウンドへ向かう。
木元はコーチの肩を叩き、自分もマウンドに足を向けた。
異変はそのとき起こった。
しゃがみ込んだままだった追分が、突然立ち上がった。グラブを投げ捨てると、坪内に向かって猛烈な勢いで突進する。坪内は驚き、歩調を緩めた。追分が自分の方へ突っ込んで来るのを見て、

反射的に体をよける。
木元が追分の名を呼んだ。追分は止まらなかった。坪内には目もくれず、そばを走り抜ける。さらに高井と磯貝の間を突っ切り、ブルペンの方へ駆けて行く。選手も観客も一様にぽかんとして、追分が走るのを見守った。
追分の行く手に、白いリリーフ・カーがある。それはブルペンに向かって、のんびりと走っていた。
追分はリリーフ・カーに追いつくなり、野獣のようにマスコット・ガールの背中に襲いかかった。甲高い悲鳴がグラウンドの静寂をつんざく。
追分はマスコット・ガールを引きずり下ろした。主を失ったリリーフ・カーが、あらぬ方向に走り出す。マスコット・ガールを芝生の上にねじ伏せると、追分は馬乗りになった。帽子を飛ばし、細い首に右手をかけて絞め上げる。ミニスカートからこぼれた太股が、ばたばたと苦しげに土の上をのたうった。
最初に我に返ったのは三塁手の高井だった。高井は追分が、マスコット・ガールの首を絞め始めると同時に、駆け出していた。何が起こったのか分からないが、とにかく止めなければいけない。その意識だけで体が動いた。
それにつられて、遊撃手の磯貝もあとに続いた。三塁側のダグアウトからも、何人か選手が飛び出す。
高井が追分の肩に飛びつき、マスコット・ガールから引き離そうとした。しかし追分はびくともしなかった。もともと体が大きく、力も強い。マスコット・ガールは早くも体を痙攣させていた。
「追分さん、やめてください」
高井が叫んだが、追分は耳を貸そうとしなかった。左手でマスコット・ガールの右腕を押さえつけ、右手の太い指をしっかりと首に食い込ませている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com